

ある。また日本においてここ2～3年、全国予報技術検討会でも梅雨の問題が取上げられている。これらは偏西風循環の問題とともに、中国における南西季節風も検討されているが、梅雨期の日日の天気は複雑で、上にのべたような広域の環流にも消長があり、モデル的な梅雨の天気がいずれも現われているわけでもない。

ところで梅雨現象の地域差という点については梅雨期の水蒸気の源泉が考えられる。昆明気象台(1955)の調査では、梅雨期を含めての夏季半年の中国南部の大雨時の水蒸気の源泉はベンガル湾からの南西気流としており、これは陶らの基本の気流の分析と一致している。村上

(1959)によれば日本の梅雨期の水蒸気の輸送は下層では南東季節風、中層では南西季節風によるとしており、また梅雨前期は一般に南西季節風により後期は南東季節風による輸送が大きいとしている。

以上が梅雨期をめぐる極東環流の焦点と見られる。なお陶詩言らの所説は気象学報に、また一部は気象集誌75周年記念号にのせられている。

中国の梅雨については整理されたものがないので梅雨のシンポジウムに際して田辺三郎氏に要点を紹介していただいた。(編集部)

【新書紹介】

小 気 候

東京教育大学 吉野正敏著

A 5版 274頁 地人書館発行 定価 680円

もうかれこれ10年以上の昔になるが、岩手県の丘陵地帯の気候を調べたことがあった。北上山地の両斜面に広がるその台地は、なだらかな起伏が芝草におおわれ、放牧した馬の群がそこそこに散見される美しい眺めであった。農地の開拓に関係した調査であったので、丘の頂きや裾に寒暖計をおき、おもに最低気温の分布状態を調べたが、地形の状況でその分布が著しく異なるのに、いまさらのように驚かされた。

日本全体というような、大きな気候の分布からみれば、等温線が一、二本横切るにすぎない→こうした地域の中に、くわしく見れば東京の気候も札幌の気候も丘一つへたてただけでももしかたされている小気候の不思議さを、あらためて感じたことであった。

考えてみれば、われわれの生活も産業も、さらにはもろもろの社会活動も、そのひろがりの範囲からみれば、こうした小気候の範囲に入ることが多い。しかもこの分野がいままでほとんど開拓されていなかったことは、むしろ不思議なことではある。

こんど吉野さんの、地人書館から刊行された「小気候」を開いてみて、この本が従来残されていた局地気候の空白を、かなりまで充たしてくれるものであることを知った。

気象学でも気候学でも、極東とかヨーロッパというような大きな規模に立ったものは、かなりまで調査も研究も進んでいる。しかしこれからはその実生活への応用面として、いわゆる局地的な小気候がますます重要視されるようになってきた。毎年日本を襲う風水害にしても、従来の大きな観測網によってでは、もうどうにもならない。局地的な気象なり気候なりがわからなくては、これからは手の下しようもない。

こうした時期に、この本が刊行されたことは、非常に大きな意義があると思う。天気予報をだす現場の技術者も、気候の調査に従事する人達も、わたくしはこの本によって、地域の気候というものをよく考えより生活にマッチしたキメの細かい予報なり調査なりをしていただきたいと思う。気象の技術者にこの本を広くお勤めするゆえんである。

吉野さんは篤学の人である。この本に引用された内外の文献についてみても、ほとんど小気候に関する重要な文献は網らされている。決してこの本が片手間に書かれたものではなく、吉野さんの絶え間ない努力の集積の上になったものであることがわかるし、内容もたんなる羅列ではなく、著者が自分の考えでよくかみしめたものであることは、一読して明らかであろう。

わたくしはこの本が、応用気象上の一つのステップとして、今後大きな役割を果たすものであることを信ずるものである。(荒井隆夫)

本誌別刷についてお願い

別刷50部までは無償でお送りします。それ以上ご必要の部数は原稿提出時にお申込み下さい。

その後の追加には応じられません。

(編集部)